

田中十九三

听

田中十九三

听

句集 昕 参百部限定版奥付

昭和六十二年十一月二日発行

著者 田 中 十九三

埼玉県川口市朝日一―一―二七  
電話〇四八二(二三)三二八四

印刷所 亀田印刷株式会社

埼玉県川口市本町三―六―九

領価 四、〇〇〇円

句集・听・目次

作  
品

第 一 章

1

第 二 章

65

第 三 章

129

第 四 章

193

第 五 章

257

第 六 章

321

六十二年中の受賞作品

388

既刊句集

389

# 第一章



初春の人形声を出したがる  
ゆつくりと鼓膜にとどく春の雷  
啓蟄のあしたは早目に目を覚ます  
耳飾り蝶がひらひら寄つてくる  
しやぼん玉ふんわり消えてゆく定め  
初蝶に道を尋ねている愚  
拭つてもふいても朧月夜かな  
芽吹く野にひとりぼつちの石仏  
おぼろ夜の影がうすれゆくふたり  
囀りの野が見え古い家たたずむ  
囀りの向うに暗い過去がある  
土筆野に胡坐をかいている仏  
耕して生涯肩書きの無い男  
踏切りを初蝶わたりきれずいる  
初蝶が矢鱈に人を恋しがる  
地図にない山から先に炎えてくる  
風ときて風が連れ去るしやぼん玉  
土筆野を仔馬は駆けてみたくなる  
種蒔いて鳥の目線避けている  
時刻表に遅れて春の汽車がくる

うららかや遠くの山が見えてくる  
張りつめた気持がゆるんでくる四温  
春の風海をわたつてくることも  
東京の真只中で土筆摘む  
耳うらを櫟りにくる春の風  
春の山だんだん人間臭くなる  
風の糸たぐれば空が遠くなる  
春愁の顔が鏡の中にある  
糸柳だらりと風のない証  
陽炎に炎えるを忘れている少女  
玩具の汽車ゆつくり走り出すうら  
げんげ野に鬼の隠れる場所がない  
野仏の手のひら蝶が触れにくる  
げんげ野に矢つ張り指定席はない  
野仏を知らぬは初蝶かも知れぬ  
堤外は雲雀の天国かも知れぬ  
春の風囀をはこんでくることも  
初蝶も矢つ張り影を曳いている  
少女の耳聡し春風くるときも  
耳飾り仲間顔して蝶もくる

穴を出る蛇午後からの汽車が出る  
おぼろ夜の首がだんだん伸びてくる  
鬱と躁もつれる春のはじめかな  
仁王の力が抜けているおぼろ  
拭くたびに孤独になれてゆく鏡  
引き出しにしまい忘れている春愁  
舗装路に落ちて椿は音立てず  
色眼鏡して永遠を見詰めおり  
ひよつとこの面が売れていてうらら  
石段でさくら吹雪に出合いけり  
たんぽぽの絮が矢鱈に飛んでくる  
げんげ野に全身埋めてみたくなる  
春の月見詰めていれば淋しくなる  
山吹きは只ひたすらに咲きいたり  
山吹きは何ごともなく極まれり  
春の雷女は後ろ向いていて  
梵鐘の響に散つてゆくさくら  
鐘楼の隅までさくら吹雪けり  
鐘楼に一つの過去となるさくら  
春風にのりきれないでいる漢

太陽の光あふれて蝌蚪生まる  
晩年が見えて花に酔うことも  
村中の風があつまる春の牧場  
風光る水鳥水の中にいて  
人死んで山いつせいに芽吹きけり  
手のひらに残さず蝌蚪生まる  
春の野をゆつくり走る車椅子  
春愁の湖がさざ波立てている  
春愁の顔をたたいていて鏡  
芽吹く日の風吹き抜ける村境  
うららかや女が髪を染めている  
煩惱がこびりついていて春野  
ふくみ鳴く鳩にも春日やわらかく  
初蝶のいのち預けている光  
少年の夢ふくらんでくる春野  
葱坊主少年夢をふくらます  
陽炎のもて余したる自由律  
初蝶のひらひら行方不明になる  
海越えてくるかも知れぬ春の鼓動  
日脚伸ぶ何事もなき母の忌日



汽笛にも淋しい刻のある春愁  
妊れば桜前線遠くなる  
争えばひとりぼちの路のとう  
風光る少年もまた笛を吹く  
葬列を見送つてゐる雪女郎  
透明な窓があるからつばめくる  
沈丁の匂い鍵穴ぬけてくる  
夕焼けの裏がわ春の水あふる  
春愁の野面を風のかおるかな  
曲つても曲つてもただおぼろ月  
どこからも見えて鏡の中は春  
土の匂いの濃くなる時の花疲れ  
つくし野に今も座つてゐる仏  
菜種梅雨首が重たくなることも  
九十九段のぼりつめたる春の風  
少年の耳聴くなるおぼろ月  
浮上する原潜春日やわらかく  
春日浴び千の影曳く千羽鶴  
少年の麦笛遠くなる詩集  
春の地震乳牛ゆつくり立ちあがる

からくりがあるから蛇穴を出る  
わが思い海底にあり春浅く  
傷口を洗う清水の湧くあたり  
げんげ野に一つの過去となる別離  
春愁の影曳いてゆくおんな坂  
故里の田水に触れにくる螢  
白骨になるまで桜見つづけむ  
日脚伸び少年声を太らせる  
人の死にかかわりもなく鳥帰る  
春彼岸くるから鋤鋤研いでゐる  
ほの暗くなるまで男耕せり  
暗がりに女の匂いしておぼろ  
男のいない出嫁ぎ村に燕くる  
つばめ来て秘境の水に触れてゐる  
種浸けていつかは豊になる村か  
花散つてローカル線の消える村  
土筆野も暮れて子らの声のこる  
縄電車だけ捨てられてゐる春野  
花散つて地球が軽くなることも  
晩年を桜吹雪のなかにゐる

春雨に濡れるを恐れている少年  
水底に一つの過去となる春愁  
敬虔な少年ひとり謝肉祭  
駆け出せば麦の穂となる少年ら  
臍の緒の干からびていて土筆伸ぶ  
菜畑の花粉にまみれている蝶か  
うららかや女が死んでゆくときも  
菜の花にまみれて蝶となる少女  
たんぽぽの絮が飛びこむ駐在所  
風光る少年の夢けむらせて  
花散つて家鴨ばかりが殖える村  
土の匂いの村の隅まで風光る  
車椅子暗い過去など捨てた春  
補聴器で蟋蟀鳴く声を聞いている  
故里に春きて他人ばかり増ゆ  
理髪椅子くると少年の夢を消す  
指で話す少女がひとり謝肉祭  
啓蟄の夜は祝杯あげるべし  
花散つてしまえば少年らしくなる  
芽吹くまで大地の鼓動聞いている

川底に雲一つありかげろえり  
南無大師一步あゆめば青嵐  
白鷺に青田のなかで何思う  
蝶もつれ行方不明になることも  
陽炎の路線を走る二時の汽車  
墓石から墓石にうつる黒揚羽  
啓蟄の夜は顔見知りばかりくる  
しなやかな指うつくしき芹明り  
鬱と躁もつれて桜散り急ぐ  
花明り湖底に人のはまりいて  
紅椿ひとつふたつと落ちにけり  
蛇穴を出てより己振り返る  
恋猫と土竜のゆくえ探るべく  
灯りても叫びても只桜散る  
おぼろ夜を肝臓すこし痛めけり  
舟借りて行方不明の蝶さがす  
暁の神の森にて囀れり  
ひらがなの雲がながれてくる野末  
目から鼻へ抜けた鴉が子を生んで  
穴を出る蛇午後からが活動期

しなやかな手が伸びてきて芹明り  
きさらぎの空で鳶が輪をえがく  
古塔婆焚いて墓場を軽くする  
春彼岸くるから古塔婆焚くことも  
囀りを鏡中に聞く女でいる  
囀りを聞く補聴器を買いにゆく  
近くより遠くが見えてくるつばめ  
ぶらんこの掴みどころのない女  
おぼろ夜を遊び過ぎたる指狐  
春の夜を遠くなりゆく父と母  
石段をのぼれば桜吹雪けり  
地球儀を廻せばさくら散りにけり  
花吹雪女が死んでゆくときも  
畦を塗ることが仕来たりかも知れぬ  
道路鏡さくら前線通り過ぐ  
花散るやいつも動きのあるこの世  
み仏の懐深くさくら散る  
ひよつとこの面を額に花見酒  
散りぎわが大事と桜散りいそぐ  
豊作を夢見て畦を塗ることも

ひよつとこの面がよく売れる花見どき  
春の夢見ていて顔を剃られけり  
嘘八百ならべて明るくなる四月  
桃咲いて骨からゆるんでくことも  
陽炎が燃えて特急電車くる  
合鍵が無いから桜吹雪けり  
うららかや裸のままでいるマネキン  
野火のよう噂広がりもう消せぬ  
もう一人の男につらき四月一日  
猫柳光は水のなかにあり  
満潮の膨れる海を如何にせむ  
ひらがなのような風きて花散らす  
陽炎もぼろぼろになる四月尽  
手のひらに何も残さず桜散る  
涅槃寺暗きところに仏在す  
啓蟄や羽根あるものは翾る  
淋しくて秘境に春の灯がゆれる  
初蝶は木の葉のように風に舞う  
過去帳にわが名とどめて散る桜  
陽炎に行方不明になることも

一抜けて二抜けて夕焼け空残る  
たんぼぼの絮より先をゆく女  
誰も来ぬおぼろ月夜の無人駅  
ぶらんこが揺れて焦点定まらず  
牛の乳重たくゆれて風光る  
地に伏して春の鼓動を聞いている  
囀りの森へひとりになりに行く  
手品師の指から炎えてくる春野  
東京の真只中で種を蒔く  
陽炎のもてあましたる女の嘘  
土筆摘むどこか疲れている女  
陽炎のところが燃えている晩年  
厚切りのレモンに話尽きぬ春  
春愁は海底にありて耳痒し  
通夜の灯が消えておぼろ月のぼる  
沈黙は美德の一つ黄砂降る  
うららかや大地の鼓動聞くとときも  
夜ざくらに酔うてもつれているふたり  
散るさくら青年いまを生きている  
土筆野へ母のことなど聞きにゆく

時計台霞のなかで刻告げる  
青岬海には海の鼓動あり  
炎える野を仔馬が駆けてゆくことも  
山頭火誰のものでもない陽炎  
晩年が見えて落花をあびている  
耳飾りきらきら春の風となる  
たぐつても手繰り切れない春の闇  
陽炎のまつただ中にいて孤独  
野草摘みたつぶり光あびている  
テトラポットの吐息聞こえてくる岬  
親ばなれして蒲公英の絮が飛ぶ  
かくれんぼの少女が霞の中にいる  
ぜんまいの拳が握つている真理  
糸柳ゆれて銀座につばめくる  
あいづちを打つも打たぬも散る桜  
ひるがえる度生長するつばめ  
不器用に生きて落花を浴びている  
ぶらんこが一日ゆれていてひとり  
出稼ぎの父より先に雁帰る  
肩書きがあるから農夫になりきれず

ひとりぼっちでいて陽炎に犯される  
つばくらめ夜の銀座を飛翔する  
抽出しに野火の匂いを溜めておく  
彼岸寺寡婦の手にある寒さかな  
啓蟄の夜は人間臭くなる  
野を焼いて遠くの山をけむらせる  
霞立つ故里の山に父はいず  
先をゆくは雪女かも知れぬ  
雪嶺は遙かにありて風光る  
からくりがあるからつばめ翻る  
げんげ田を耕しにきて耕さず  
うららかや柱も骨もゆるみけり  
葉桜となるやお面白くなるこの世  
いつの世も人間臭き花の山  
糸柳ゆれて風なき父のくに  
おぼろ夜をひとりの女として老ゆる  
花吹雪人それぞれ行路あり  
たんぼぼの絮のゆくえは知らずして  
天上が昏くて桜散りゆけり  
さんさんと光を浴びている大地

底抜けの明るさのなか散るさくら  
埴輪の目抜けて桜を散らす風  
春の夢二つの足がはみ出して  
懐に風はらませている涅槃  
曳船の力余つていてさくら  
春の雨降るからくりのあるこの世  
二時の汽車出てから桜前線くる  
緑野に己が屍残すべく  
花疲れして足腰を叩きけり  
散つてから淋しがつている桜  
猫柳咲くより先に揺れるなり  
春の夜をばらばらになる鯛の骨  
つくし野に取り残されている仏  
背を見せて男が抱いている春愁  
臘夜はいつも独りでいることも  
口びるに一つの過去となる桜  
マネキンの足元昏きさくらどき  
裏切りも過去のひとつなるおぼろ  
土筆野に子を呼ぶ母が遠くなる  
うららかや笑い袋のネジを巻く

炎える野を駈ければ野性の血がたぎる  
五月の空雲の流れはほしいま  
うららかに廻りつづけている木馬  
鳴く蛙蛇がきき耳立てている  
西行忌花の下にて死を願う  
後継があるから蒲公英の絮が飛ぶ  
おぼろ夜の会議曖昧な顔でいる  
雪嶺を遙か遙かと蝶が舞う  
屍になるまで蝶を見ていたり  
たんぼぼの絮より先に故郷を出る  
なにごとくも無くていちにち葱坊主  
水芭蕉馬のかたちの耳を持つ  
水芭蕉昏きあたりに咲くことも  
いちどだけ浪しずもりし春の海  
敵の数だけ葱坊主の首を取る  
故里の径いつせいに陽炎える  
癌病棟おぼろの月に覗かれる  
種蒔いて夕焼け空を置いてくる  
春らしくなつて首吊る枝がない  
鳥けもの春は華麗になりけり

魂も乳房も燃えている五月  
聖五月何ごとくも無き空の色彩  
皿割れて春の破局が急にくる  
寝不足の顔ばかりなり春の丘  
春の鳥しきりに朝を恋しがる  
ビー玉の転げて春の色になる  
眼の玉が欲しい埴輪や春の空  
能面に似たる顔なり春の宵  
しあわせな色でたんぼぼ咲きており  
絮になるまで蒲公英を観察す  
骨壺をいだいて春の野を過ぐる  
耳鳴りの耳の奥まで春の声  
川の向うに母がいて踊るかな  
桜桃忌まなこ二つがさ迷へり  
春愁も後ろ姿にある日暮  
いろいろな雲が流れてくる春野  
墓場までつづく焰の祭かな  
仏塔の高きに風の光るなり  
陽炎が重なりあつている真昼  
桜桃忌うらみつらみの無きこの世

春の湖いちにち光あふれおり  
牡丹散る闇重ければ重き音  
沈丁の匂いに噎せていてひとり  
牡丹散る女のいのち了るよう  
花のなか漂々といて孤独なり  
いまもなお春日のなかにある戦後  
四月の空蒼しと誰かが記したれば  
うららかに姥捨山は高からず  
メモ帳は持たずひたすら春に酔う  
春の蟬鳴かねば山が遠くなる  
おなじ夢また見て春に酔うことも  
いつきても誰にも逢わず春木立  
人の死にかかわりながら桜見る  
日本の女うつくし土筆摘む  
落椿うしろも前も生々し  
腕一本折れても春日やわらかし  
藤房がゆれて男は立ちどまる  
頭軽くなるまで泳ぐ春の海  
人ら皆花のうてなに乗れたがる  
いろいろな雲が流れて春の海

春木立雲の流れを垣間見る  
用のない鍵が置かれて春さむし  
恥多きこの世に生きて土筆摘む  
聖五月真面目くさつた顔でいる  
春眠や戦の夢を見ることがも  
椿落つあわれ秘境に音立てて  
鱗一枚落ちて和らぐ春の川  
罪深き花から先に落ちにけり  
たんぼぼの花の数だけ絮が飛ぶ  
刃物研ぐことにも慣れておぼろかな  
嘘をつく四月生まれの女の子  
死ぬときも薄化粧して遠蛙  
髪梳いて蛍の夜にそなへけり  
柿若葉光を避けているときも  
一枚のはがきが届く麦の秋  
麦秋やわれをいざなう白い風  
緑の森見せ場をもたぬ鴉の子  
人形の首が重たい菜種梅雨  
淋しくて毛虫ゆつくり這いまわる  
輝り降りもありて四月は西東忌

九十九夜通いし後は遠蛙  
雪女くるから犬を遠ざける  
香袋忘れてゆきし雪女郎  
茫々と暮れゆく空や涅槃西風  
雁帰るいちにち空を見ておれば  
花散つて山いつせいに緑なす  
滝音のおとなしうなりし春の暮  
花あふれ揚羽も声を出したくなる  
化石にはなれない定め蝶の屍  
何ごともなく花散る夜も昼も  
滝音はのどかなれども散るさくら  
陽炎に我が屍を託すべし  
陽炎に幼なき靴を野に残す  
夜明け待つ小鳥とわれと散るさくら  
花時計ゆつくり廻つてゐる長針  
春眠や夢が広がりゆくことも  
陽炎のもて余したる鋤物町  
首の骨鳴る晩年の葱坊主  
蛇穴を出てから後は知らざりき  
鉄の町鉄の匂いのさくら散る

裏作の効かぬ土地なり蝶がくる  
麦熟れて空の青さは無限かな  
青空へ揚羽のあとをついてゆく  
川底も流れてゐるか涅槃西風  
陽炎の真只中で杭を打つ  
陽炎や腑抜となりし父の椅子  
抜け殻がひらひら離婚話出る  
いつの世も肘ついてゐる霞かな  
花も葉も濡れて桜となる女  
陽炎のもて余したる僧の墓  
葬列を遙かに雁の帰りゆく  
野を駆ける少年のいて風光る  
蝶生まれ柩の小窓あけておく  
初蝶は行方不明になりにゆく  
昏れるまで汗ばんでゐる葱坊主  
だみ声のつづく日暮の葱坊主  
少年に何ごともなく葱坊主  
車椅子とめて土筆摘むことも  
墓地を買う話などして春うらら  
透明になるまで揺れる猫柳



透明な海から春の風きたる  
妊りし海女が見ている春の海  
花ぐもり小銭ばかりがポケットに  
人の死を考えていて芥子坊主  
蝶生まる噂話はそのままに  
椅子一つ置かれて蝶となる日暮  
花咲いて過去がだんだん遠くなる  
花散つて過去の話となる日暮  
たんぼぼの絮となるまで覗かれる  
生臭い五月の風となる鍵穴  
土筆摘む女が本音吐くときも  
春の野を駆ける少年孤独かな  
うららかヤチャツクの甘い旅靴  
縄梯子ゆれて遠くを帰る雁  
つばめ返転未婚の女ばかり増ゆ  
西鶴忌知能すぐれた女増え  
うたた寝の夢はとぎれとぎれかな  
からくりがあるから桜吹雪けり  
孤独が好き春日たつぷり浴びて  
陽炎も女の嘘をもて余す

花びらが一つ二つと母の墓  
芥子咲いてから面白くなることも  
いろいろな噂がながれてくる五月  
椅子一つ置かれて風となる五月  
花ぐもり女矢つ張り生臭し  
夏密柑どつどつ山が膨れだす  
菜の花が咲いても咲いても過疎の村  
うららかヤ杭一本を打ちにゆく  
分譲地ひらひら蝶がよつてくる  
夕霞湧いて吉野の山けむる  
霞から民話生まれてくることも  
満開の花に腑抜けとなる吉野  
おぼろ夜を独り暮しでいる女  
しつけ糸解けば若葉の風きたる  
たんぼぼの絮が飛びかう夜も昼も  
糸車たぐつてもたぐつても五月闇  
み仏の指から風となる五月  
陽炎のとりことなりし父と母  
花疲れ鴉が無口となることも  
春月に覗かれてゐる死ぬときも